

広告特集

企画・制作 朝日エージェンシー西部

第66回日本婦人科腫瘍学会学術講演会 開催記念

女性を守る 婦人科がん医療

～その進歩と期待～

子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん――いずれも婦人科の悪性腫瘍だが、発症原因など詳細は大きく異なる。7月18日から鹿児島市で「第66回日本婦人科腫瘍学会学術講演会」が開催されるにあたり、会長の小林裕明氏に婦人科腫瘍の現状や治療についてお聞きした。

原因も好発年齢も多様な婦人科がん

子宮頸がんの好発年齢は30代で、妊婦さんの健診で一番多く発見されるがんであることから、マザークリフトといわれます。発症原因の約95%ががん性のHPV(ヒトパピローマウイルス)感染で、初期の場合では不正性器出血がないこともあります。子宮体がんは閉経前後から増え、こちらも不正性器出血が初期症状ですが、頸がんとは全く異なる子宮がんです。体がんの発症原因には未産婦、エストロゲン製剤の長期使用、肥満や欧米化した食生活などが挙げられます。卵巣がんは性器出血等の自覚症状もないため進行して発見される例が多く、サイレントキラーといわれます。

罹患数は、前がん病変(異形成、上皮内がん)を含めると頸がんが多いですが、それを除くと体がんが最多です。本邦の婦人科がんは三種とも増加中で、特に頸がんは他の先進・富裕国が減少に転じているのに日本だけが、低いHPVワクチン接種率などのため増加しています。

ゲノム解析、新薬、ロボット手術など新たな治療が次々に

治療はがんの発症部位や悪性度、進行期、年齢、合併症など、患者別の状態を考慮して決定します。頸がんの手術は前がん病変(異形成、上皮内がん)なら病巣だけ切除し、子宮温存も可能ですが、I期以降は原則として子宮



鹿児島大学医学部産科婦人科学教室 教授
同・婦人科がん先端医療学講座 教授
日本婦人科ロボット手術学会 理事長
公益社団法人 日本婦人科腫瘍学会 常務理事
第66回日本婦人科腫瘍学会学術講演会 会長

小林 裕明氏

第66回日本婦人科腫瘍学会学術講演会

Next innovation toward paradigm shift

2024年 7月18日(土)～7月20日(日)

会長 小林 裕明
鹿児島大学産科婦人科 教授

会場 城山ホテル鹿児島
〒890-8586
鹿児島県鹿児島市新野町41番1号

第66回日本婦人科腫瘍学会学術講演会 **市民公開講座**

9月8日(日) 14:00～17:00 (開場13:30～) 会場:鹿児島県医師会館 大ホール

テーマ:「子宮頸がんワクチンで守れる女性の人生、赤ちゃんの命」

演者:小林 裕明氏(医師の立場から)、原 千晶氏(タレント、患者の立場から)

※詳細は今後のメディア、教室ホームページ等で確認ください。

「新時代」へ向かう婦人科がん医療 予防と検査で早期発見

新たな薬剤やロボット手術の登場など、婦人科がん治療は大きく進歩していますが、やはり大事なことは予防と早期発見です。頸がんはHPVワクチン接種での予防、検診での早期発見が可能です。体がんや卵巣がんは生活習慣病に注意し、小さな体調の変化を軽視せずに産婦人科を受診してください。婦人科がんの治療は日進月歩で進んでいるので、どのがんでも予防と早期発見に努めれば、怖いものではありません。

全摘出になります。体がんも基本的に卵巣・卵管まで含めた子宮全摘は必要ですが、I期のうち初期なら腹腔鏡やロボットで手術でき、術後の抗がん剤も不要です。卵巣がんはI期のうちごく初期か、抗がん剤が良く効くタイプの腫瘍なら子宮と対側の卵巣は温存でき、将来の妊娠も可能です。

近年、がんの遺伝子レベルでの解析や分子標的薬の開発が目覚ましく進み、その患者さんのがんに良く効く分子標的薬を投与するプレジジョンメディスン(精密医療)が始まりました。

また、術後患者の負担軽減、OOL(生活の質)向上の為に、①子宮がんのリンパ節郭清後に下肢が腫れるリンパ浮腫を回避するためのセンチネルリンパ節術中検査、②傷も小さく体に優しいロボット手術、③子宮頸がん手術で将来の妊娠を可能とする妊孕性温存手術などの取り組みを行っています。